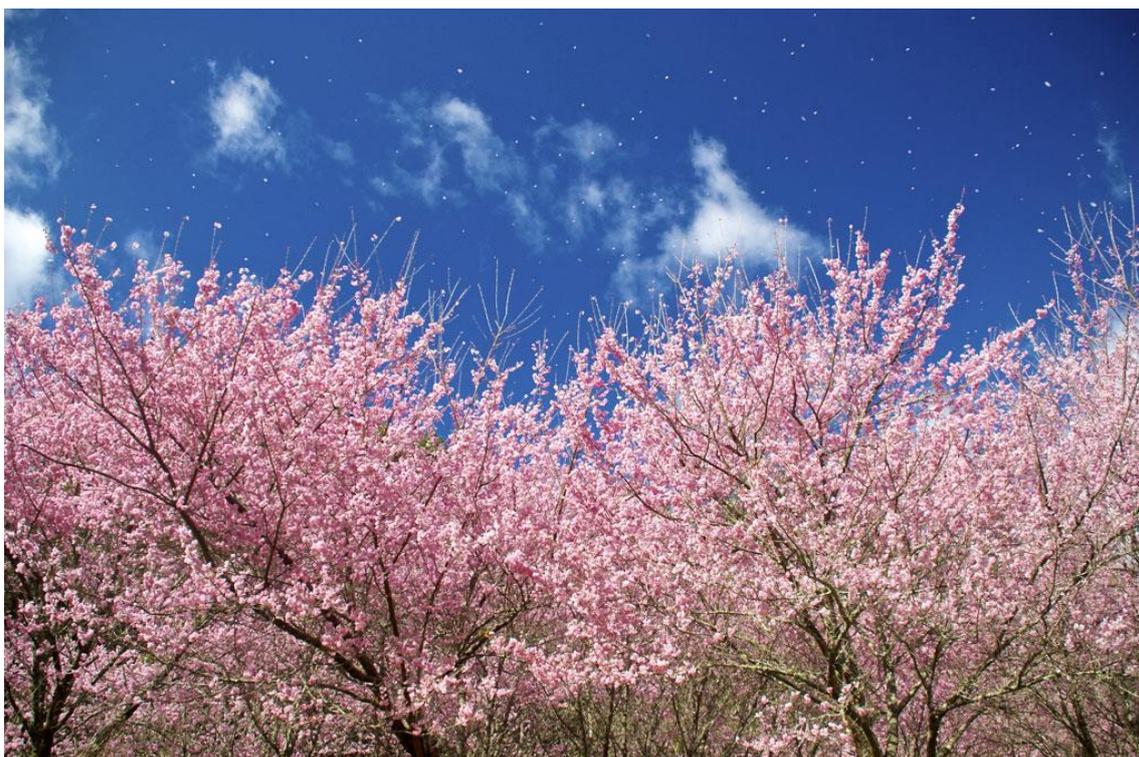


富大考古通信



第 24 号

つながることの面白さ

今年度の講読は、日本語に翻訳された著作も多いアメリカの考古学者ブライアン・フェイガン等による“Archaeology A Brief Introduction (12th edition)” (2016) をテキストとした。

第 1 章の考古学の歴史についての文章から読み始めたが、科学的な発掘調査以前の古物収集家たちのふるまいを述べた箇所、イギリスにおけるビクトリア朝のバロー（盛り土をもつ墓）の発掘は、粗暴で時としてピクニック以外の何ものでもなかったとし、当時の『ジェントルマンズ・マガジン』（1731 年創刊のイギリスの総合文化雑誌）の記事が紹介されていた。しかし、添えられた写真は現在の遺跡の様子を示したもので、そこに記された様子をうかがい知ることは難しかった。

テキストを読み進み、19 世紀後半から 20 世紀にかけての科学的な発掘調査の萌芽期について述べられた項では、ピットリバーズ（1827～1900）とともにモティマー・ウィーラー（1890～1976）の業績が語られた。ウィーラーは、方眼による調査法など現在に通じる発掘調査の方法を開拓したイギリスの考古学者で、彼の著書“Archaeology from the earth”

（1954）には、インドの都市遺跡の土層断面を例に、複雑な重複関係をもつ実際の土層のありかたと、深度に頼った層位を対比し、後者の問題点を指摘した著名な図が掲載されている。11 月 21 日の授業では、上原真人「考古学があつかう年代」『考古学—その方法と現状—』（2009）から注記の翻訳されたこの断面図を引用して紹介した。

しかし、原文はどうなっているのだろうと思い、大学院の頃に研究室の仲間と複写したコピーを引っ張り出してみた。その時に目にしたのが、発掘の歴史の章で『ジェントルマンズ・マガジン』から引用された挿画であった。年代と遺跡は異なるものであるが、テキストの記述はこうした姿なのだろうと思った。12 月 5 日には、前述の断面図とともにこの挿画をプリントにして配布した。



12月11日、大阪府立弥生文化博物館の館長を長くつとめられた金関恕先生の卒寿のお祝いに上梓された『考古学と精神文化』・『弥生の木の鳥の歌 習俗と宗教の考古学』の二著を入手した。ともに先生のお人柄と深い学識に裏づけられた著作集となっている。前者を読み進め、1985年に『岩波講座日本考古学』第1巻に寄せられた「世界の考古学と日本の考古学」に目を走らせていると、次のような文章にあたった。

「その頃（19世紀中頃：筆者註）の発掘風景の好例は、『ジェントルマンズ・マガジン』の1852年12月号に掲載された木版画と解説記事にうかがわれる。すなわち、1844年8月、ケントのメイドストンの谷の上にある無名の丘に、トップハットをかぶった、土地の貴族や郷紳の一行が集まった。彼らが引き連れた12、3人の労働者はローマ時代の高塚を切り通す、大規模なトレンチを掘り始めた、という記事によって解説が始まり、当事の記録を引用して、「墳丘を完全に切り通すには、まる4日間を要した。しかし、われわれは全くのところ掘り手ではなかったので、皆が退屈しないように気を使った。・・・丘の上でピクニックするために、十分な食物が準備され、皆は塚の傍に立って、仕事を見守り指揮をとった。・・・発掘とピクニックの合い間には、いろいろなゲームや娯楽に耽って時間つぶしをした。幸い季節もよく、南西から驟雨に見舞われたのは一、二度だけだった。その折りに雨宿りする場所は、自分達で掘ったトレンチしかなかった。そして、城塞攻撃に進軍するローマの兵士達が楯を組み合わせ身を守ったといわれるように、われわれも、パラソルや洋傘を組み合わせ、まずは雨漏りしない屋根を頭上に造ったのであった。・・・」

木版画はこうした光景を如実に表している。このような長閑な発掘が、当時の人々の知的好奇心の表われである。モティマー・ウィーラーは、好古家のかかる知的好奇心が母胎となり、時充ちて近代考古学がはばたいていたと述べている。」

金関先生のこの文章はこれまで幾度も読んでいたはずであるが、この時にも新鮮な理解へとつながった。そして、短い時間のなかで理解が次々に結ばれていったことの面白さを感じるとともに、重要な文献を折にふれて繰り返し読むことで、その都度知識を重ね合わせていくことの大切さをあらためて考えた。 (次山 淳)

目次

つながることの面白さ

次山淳

卒業論文要旨

縄文時代前期の北陸地方におけるニホンジカの利用 一鳥浜貝塚と小竹貝塚の比較を通じて一

佐藤巧庸

縄文時代前期の日本海沿岸地域における漆文化の研究

蒲生侑佳

飛鳥・奈良時代における越中の造瓦組織の検討

泉田侑希

越中における近世「流し掛け」陶器の研究

二口頌之

卒論発表会と追いコンのお知らせ

編集後記

卒業論文要旨

縄文時代前期の北陸地方におけるニホンジカの利用

―鳥浜貝塚と小竹貝塚の比較を通じて―

佐藤巧庸

縄文時代においてニホンジカは主要な狩猟対象獣であり、食料や道具資源として利用され、遺跡からの出土量も非常に多いことから多数の研究が行われてきた。しかし、北陸地方においては総じて動物遺体の出土する遺跡が限られていたことから地域的な検討が十分とは言えない。

そこで、本研究では北陸地方における地域間の比較検討が進んでいないという問題を解決するため、縄文時代前期後葉の同時期かつ良好な保存状態の資料が出土している鳥浜貝塚と小竹貝塚出土ニホンジカを対象とし、2遺跡間の比較を通じてニホンジカの利用における北陸の地域性を検討する。その結果から、北陸地方で生活を営んでいた縄文人の生業の一端を明らかにすることが目的である。

対象とする資料は、鳥浜貝塚では1984年度調査1区34層出土ニホンジカ455点、小竹貝塚では2009、2010年度調査B・C地区貝2～7・37・39層出土ニホンジカ843点である。鳥浜貝塚資料については未整理資料について同定を行い、小竹貝塚については再同定を行ったうえで分析資料を得た。それらの資料において骨端癒合状況からの年齢構成、部位別出現頻度、計測からの性査定といった分析を行った。

分析の結果、2遺跡の共通性として幼獣若獣は主要な狩猟対象とされていないこと、食料・骨角器の素材として遺跡内部で利用されていたことが挙げられる。一方で遺跡に搬入されている部位が異なること、廃棄地が異なることが明らかになった。

骨端癒合状況による年齢構成は、鳥浜貝塚における先行研究で下顎歯からの年齢査定により明らかにされてきた推定年齢2～4歳獣が多く含まれるということを追認できたとともに、小竹貝塚では下顎歯の出土が少なく年齢構成が検討されていなかったが、幼獣若獣に偏らない狩猟選択を明らかにすることができた。部位別出現頻度の分析から鳥浜貝塚では頭蓋の遺跡への搬入から頭と胴体が切り離されることなく搬入されていた一方で、小竹貝塚では頭蓋の出土が少ないことから、ニホンジカの頭蓋について異なる利用がされていたことがわかった。また、資料の保存状態やイヌの咬み痕が残る資料の多寡から、ニホンジカの骨は利用後、鳥浜貝塚では水中に廃棄されており、鳥浜貝塚では貝で埋め立てられ形成された陸地に廃棄されていたことが明らかとなった。

今後の課題としては、遺跡内で出土地点や時期の異なる資料との比較を通じて、今回得られた各分析で得られた結果が2遺跡において変化せず一定であるのかを検討することが求められる。更に北陸地方における他の遺跡、東日本太平洋側といった他地域、他時期の遺跡との比較検討を行うことで、より北陸地方の地域性を明らかにすることができるのではないかと考える。また今回は詳細に検討できなかった骨角器からみた道具資源としてのニホンジカの利用についても明らかにすることを今後の課題としていきたい。

縄文時代前期の日本海沿岸地域における漆文化の研究

蒲生侑佳

日本列島での漆利用は、縄文時代にさかのぼる。日本列島における漆とはウルシノキ (*Toxicodendron vernicifluum*) から採取された樹液を精製したものをさす。縄文時代の漆の利用を裏付ける遺物が遺跡から出土することは、有機物である漆の性質上稀であり、低湿地などの特別な環境下で保存されていなければならない。近年では、低湿地遺跡の発掘調査事例の増加によって、縄文時代の漆の利用を裏付ける遺物が数多く出土している。考古学の分野では、漆塗土器や籃胎漆器を中心に、肉眼観察可能な彩文の分類や、漆が塗られる製品に共通する胎の性質について研究が行われてきた。また、自然科学分析の進展によって漆製品の内部構造や漆そのものの分析が可能になったことで、当時のウルシの栽培や漆工技術が明らかにされてきた。しかし、日本列島で見られる縄文時代の漆製品は、出現した時点ですでに高度な漆工技術を有しており、塗料としての漆の利用がどのように始まったのかについては明らかになっていない。本研究では、初期の漆利用が確認できる日本海沿岸地域の縄文時代前期に焦点をあて、漆製品の変遷と対象遺跡内での漆工の在り方について明らかにすることで当該地域における漆利用がどのように展開していったのか検討することを目的とした。

分析対象とした漆製品が出土した遺跡は、福井県鳥浜貝塚、富山県小竹貝塚、山形県押出遺跡の3遺跡である。本研究では、漆製品を胎によって漆塗土器、漆塗木製品、漆塗繊維製品、漆塗装飾品に分類し、それぞれの時期、遺跡内での分布、漆の塗り方について分析を行い、これまで行われた自然科学分析の結果を踏まえて考察を行った。また、漆工に関わる漆液容器についても、同様に分析を行った。

分析の結果、漆塗木製品は縄文時代前期初頭から見られる遺跡が存在するのに対し、漆塗土器は、前期後葉の時期からみられ、胎によって漆が塗られるようになる時期が異なり、特に漆塗土器は鳥浜貝塚と小竹貝塚で同時期に出現していた。漆の塗り方は、漆塗土器と漆塗木製品でそれぞれ7類に分類した。遺跡間で類似する塗り方がみられ、編年図を作成することで、遺跡内の時期的な変化について明らかにした。特に漆塗土器では、土器の器形や文様と漆の塗り方対応関係を推定した。さらに遺跡内での漆工の有無については、漆製品と漆液容器の出現時期の分析から遺跡内で漆工を行っていた可能性が高い遺跡と低い遺跡の存在を想定した。遺跡内で漆工が行われていた時期がある可能性を推定した。小竹貝塚（前期中葉頃）と押出遺跡では、漆液容器が、「作業場」と考えられる遺構またはその付近から出土しており、遺跡内漆工が認められない時期に漆製品が多く出土している鳥浜貝塚と小竹貝塚（前期後葉以降）では、出土漆製品が他遺跡からの搬入された製品である可能性を想定した。

しかし、本論では、漆製品の搬入元となる遺跡や地域を推定することができなかつたため、対象遺跡の漆製品だけでなく、他遺跡から出土した漆製品についても検討することで縄文時代前期の漆文化の展開について、今後さらに明らかにしていきたい。

瓦の全国的な研究は、軒瓦の瓦当文様を分類・整理し、編年を編んだり地域への伝播を論じたりする研究が主流であり、丸瓦・平瓦を分析・検討する研究は多いとは言えない。しかし、瓦生産遺跡でも消費遺跡でも大量に出土するのは丸瓦・平瓦である。丸瓦・平瓦が持つ情報量は、軒瓦と比較するとはるかに少ないが、出土量は軒瓦を上回る。そのため、丸瓦・平瓦は、軒瓦が担っているような分布論などではなく、1つの瓦工房・生産遺跡の操業形態・工人の動向を捉えるのに適した研究材料と言える。近年の瓦研究では、瓦の文様・技術の伝播過程を正確に把握することの重要性が指摘されている。梶原は、従来の瓦研究で主流であった「同一の瓦当文様の分布状況に対し、文献資料等を援用しながら歴史的な意味を付していく」という手法ではなく、その生産体制のあり方を比較すべきとする「造瓦組織論」を提唱している(梶原 2006「瓦当文様受容に関する一考察」『考古学研究』53-3 考古学研究会)。越中の古代瓦研究も全国的な研究動向と同様に、北陸地域を対象に軒瓦の同範・同型式瓦の整理を通して主に文様系譜について論じられており、生産遺跡内で工人がどのように瓦を製作し、造瓦組織を形成していたかを考察した研究は少ないと言える。

本論で対象にした栃谷南遺跡は、奈良時代(8世紀)に営まれた窯跡である。奈良時代の律令制下における越中の窯業生産体制の実態を解明できる遺跡として重要な遺跡である。

本論では、白鳳時代末から奈良時代前半に操業していたとされる栃谷南遺跡を対象に、大量に出土した丸瓦の中から布綴目のある丸瓦を抽出し、瓦に残された道具の痕跡や成形手法の痕跡を要素として抽出し、観察を行う。抽出した各要素は、丸瓦製作工程に従い、組み合わせて分析する。資料観察を通して工人たちがどのように瓦を製作し、瓦の製作を通じて工人たちがどのように組織化されていたのかを解明することが目的である。

分析の結果、第一に、布綴目を持つ丸瓦を観察すると丸瓦模骨 2 種類、布綴目 7 種類、縄叩き板 1 種類、縄叩き方 3 種類、凸面調整 3 種類、凹面調整 3 種類という道具の痕跡や丸瓦成形技法といった要素を抽出することができた。第二に、それらの要素が一枚の丸瓦でどのように組み合わせられているかを分析すると、特定の道具と特定の工人が常に結合すると考えられる組み合わせ 4 組と、特定の工人どうしの結合が見られたが特定の道具と工人の結合が見いだせなかった組み合わせ 2 組、道具も工人も特定の組み合わせを明確に見出すことができなかった 1 群が存在するという結果を得た。

この結果から、栃谷南遺跡で瓦生産に従事していた工人組織には、3 段階の操業形態の変遷があったと考えられ、飛鳥時代から続く伝統的な単独操業型から次第に、当時の最新技術とされる協業型へと移行したことが想定される。

しかし、栃谷南遺跡では大量の丸瓦が出土しているにも関わらず、本論では特定の丸瓦のみを扱う研究となり、数量的に造瓦組織の特徴について言及することが出来なかった。また、平瓦との比較・検討を通して、より詳細な造瓦組織の解明が今後の課題である。

越中における近世「流し掛け」陶器の研究

二口頌之

近年、富山市では北陸新幹線の開通に伴う富山市中心市街地の都市計画を策定し、富山城址公園、富山市中心市街地を新たに整備するため、発掘調査を行っている。その発掘調査に際して、流し掛け技法により施釉された近世陶器が出土した。伝製品や窯跡資料から、おそらく越中瀬戸焼、小杉焼、丸山焼のいずれかであろうという話であったが、各三窯に関する考古学的な研究や特に流し掛け技法に注目した検討は数が限られている。

そこで本研究は、越中瀬戸焼、丸山焼、小杉焼の三窯の伝世品、窯跡資料、富山城下町遺跡から出土した流し掛け陶器を対象として、各窯の製品的特徴を明らかにし、器種や流通範囲、使用階層について明らかにすることを目的に行う。

対象とする資料は各窯の伝製品及び窯跡資料、富山城下町遺跡から出土し、抽出された流し掛け陶器 127 点である。富山城下町遺跡出土の流し掛け陶器に関しては器種、釉薬(外面、内面、文様)、法量、素地、焼成などについて観察を行い、分析を行った。

分析の結果、越中瀬戸焼、丸山焼、小杉焼には釉薬の文様から特徴が明確に分かれていること、法量にもある程度特徴が見られること、富山城下町遺跡から出土した 127 点の流し掛け陶器のうち、越中瀬戸焼が 4 点、小杉焼が 93 点、丸山焼が 30 点出土し、小杉焼に偏って出土していたことが明らかになった。

また、これら富山城下町遺跡における流し掛け陶器は昔の絵図と見比べると、武家屋敷地からの出土が多く、町人地からの出土が少なかった。

他にも、富山県内で富山城下町遺跡以外の流し掛け陶器の出土遺跡を調べると、千原崎遺跡(富山市)、水橋金広・中馬場遺跡(富山市)、願海寺城跡(富山市)、針原 I 遺跡(富山市)、小出城跡(富山市)、中名 V・VI 遺跡(富山市)などから出土していることが明らかになった。

分析の結果から、各窯の窯跡資料、伝世品などから得られた特徴の分類を追認できたことに加え、新たにいくつかの特徴を加え、分類項目をより詳細に設定することができた。また、富山城下町遺跡の出土地点から、流し掛け陶器の使用階層として武家屋敷で主に使用され、町人地では入手が難しく、当時の流し掛け陶器の希少価値が高かったことを想定した。他にも、富山城下町遺跡以外の出土地点は全て北陸街道沿いに位置しており、北陸街道が交通の要衝であったことや、流し掛け陶器が地産地消するだけでなく、流通していた事実を窺わせる。また、加賀藩産物とされる小杉焼が富山城下町遺跡以外で出土での出土例が見られなかったことは小杉焼の交易品としての性格が強く出た結果だと考える。

今回の研究では、製作年代や使用年代にまで言及できていないこと、また富山近県、もしくは全国での流し掛け陶器の出土が見られなかったことから流通の範囲や状況まで明らかにできなかった。資料の増加を待ちつつ、今後の課題としたい。

平成 29 年度富山大学考古学研究室卒業論文発表会

日時：2018 年 3 月 4 日（日）13 時 30 分～

場所：富山大学人文学部 1 階 第 1 講義室

当日のスケジュールは以下の通りです。（順番が入れ替わることがあります。）

聴講は無料で、申し込みは不要です。皆様ふるってご参加ください。

お問い合わせ等がございましたら 076 - 445 - 6195（富山大学考古学研究室）もしくは

tomidai_kouko@yahoo.co.jpまでご連絡ください。

【卒業論文】

- ①佐藤巧庸 縄文時代前期の北陸地方におけるニホンジカの利用 一鳥浜貝塚と小竹貝塚の比較を通じてー
- ②蒲生侑佳 縄文時代前期の日本海沿岸地域における漆文化の研究
- ③泉田侑希 飛鳥・奈良時代における越中の造瓦組織の検討
- ④二口頌之 越中における近世「流し掛け」陶器の研究

追い出しコンパのお知らせ

例年以上の寒気が押し寄せ厳しい寒さが続くなか、春の訪れを心待ちにしているこの頃です。

さて、富山大学考古学研究室では、3月4日（日）の卒業論文発表会の後に追いだしコンパを開催します。ご多忙中かと思いますが、参加していただければ幸いです。

日時：3月4日（日）

場所：一次会…暖座クラシック富山駅前店 時間 18時～20時 会費 5000円

※参加を希望される方は tomidai_kouko@yahoo.co.jp までご連絡ください。

※費用は出席者の人数によって多少前後する場合がありますので、ご了承ください。

※二次会は当日の人数により決定します。場所は未定です。

一次会の場所については、以下の地図をご覧ください。

一次会 暖座クラシック富山駅前店



編集後記

今年は寒波による大雪の影響で例年以上の厳しい寒さが続いております。

2月も後半に入り、日々春を待ち遠しく感じています。春はお世話になった先輩方とお別れする季節でもあり、そして新たに2年生を研究室に迎える季節でもあります。

卒業される先輩方は、富大考古通信に原稿を提供していただきありがとうございました。

これから多くの困難や苦労もあるかと思いますが、それらを乗り越えて自らの道を進んでいかれることをお祈りしております。

今年の春からは、新たに2年生が考古学研究室入ってきます。新しい仲間を迎えて、研究室がますます楽しく、そして全員で助け合いながら学ぶことができる場となるよう、一同頑張っまいります。

(峯村海生)

富大考古通信 第二十四号

配信日 2018年2月

編集・配信 富山大学人文学部考古学研究室

住所 930-8555 富山市五福 3190

TEL 076-445-6195

留守番アクセス 4000 BOX 番号 6195

HP <http://www.hmt.u-toyama.ac.jp/kouko/index.html>

メール tomidai_kouko@yahoo.co.jp

※メールにつきましては、迷惑メールと識別するため、タイトル必ず「富山大学考古学研究室」と入力して下さい。ご協力お願いいたします。